

沖縄言葉

石川 文洋

いしかわ ぶんよう / 1938年沖縄県那覇市生まれ。写真家。毎日映画社、香港のスタジオ、朝日新聞社勤務などを経て、現在はフリーカメラマンとして活躍。1998年ベトナム・ホーチミン市戦争証跡博物館内に「石川文洋ベトナム報道35年 戦争と平和」常設室開設。著書に「ベトナム戦争と平和」(岩波書店)、「戦場カメラマン」(朝日新聞社)などがある。

エッセイ

わたしは一九四三年、五歳のときに家族とともに沖縄から本土に移住した。それまではずっと沖縄言葉で生活していた。沖縄言葉と共通語はずいぶん違う。翌年、千葉県船橋市の小学校に入学した。子どもなので共通語にはすぐ慣れたが、それでもあやしい言葉を使ったようだ。「やわらかい」を「やはらかい」と言って先生や生徒たちに笑われたことを今でも覚えている。

わたしは次男だったが母方に養子に行くことになつていたので、中学三年生までは安里姓を名乗っていた。そういうこともあつて小学校時代は「オキナワ」というニックネームをつけられていた。沖縄生まれということに引け目は感じていなかったが、両親が沖縄言葉で話し合っているところを人に聞かれたら恥ずかしいと思つたことがある。

今は沖縄言葉は素晴らしい文化だと思つている。共通語では表現できないニュアンスを含んだ言葉が多い。わたしは本土の生活が長いので今では話すことはできないが、聞く分には八〇パーセントは理解できると思つている。沖縄言葉は喜怒哀楽を表現する点で、特に心情があらわれているように思つた。

わたしが沖縄へ帰つたときは、祖母は沖縄言葉、わたしは共通語で会話が成立していた。しかし、現在が世代が変わつて、子どもをもつ親たちも沖縄言葉が話せなくなつていく。

原因は沖縄言葉を話していたお年寄りたちが亡くなつてきたこと、共通語による学校での会話、家庭に定着したテレビの影響などによる。以前、読谷村長をしていた山内徳信さんにお会いしたとき、役場では、受付、職員の話も含め、全て沖縄言葉にしてはいかがでしょうかと提案したことがある。

父は沖縄の時代小説や芝居の脚本を書いていた。昨年一月、日本橋の三越劇場で父の作品「吾国シヨウガネ」が上演された。沖縄から公演にきた主演の大城光子さんほか、沖縄芝居の役者の方々が全て沖縄言葉で演じた。本土に住む沖縄県人会の人びとは久しぶりに沖縄芝居を楽しんだようだ。

戦前、戦後は沖縄芝居の全盛時代だった。今では、沖縄言葉で脚本を書く作家、演じる役者も少なくなつた。言葉は子ども時代に覚える。沖縄ではせめて学校生活のなかで週に二、三時間は、沖縄言葉の時間を設けることができないうかと思つている。



目次

AUGUST 2006 8
月刊みんぱく

01 エッセイ 世界へ世界から
沖縄言葉
石川 文洋

02 特集 写真
受信される記憶
港 千尋

「華僑の故郷」の歴史表章
韓 敬
世界の屋根の村での撮影
高山 龍三

03 撮影者の「立ち位置」

竹内 潔

写真とアウラ

久保 正敏

スラムで生きる人

北森 絵里

08 未来へのむくミュージアム

民族学とアートの融合

ーバリの新しい博物館 ケ・ブランリー

大森 康宏

11 表紙モノ語り

奇妙な楽器ーマトラカー

山本 紀夫

12 みんぱくインフォメーション

14 万国津々浦々

「テヘランゼルス」のノールース

橋原 敦子

15 時論・新論・理想論
島嶼国の民主主義とストライキ
須藤 健一

16 外国人として生きる
ラジャプサーデさんの引越し
藤元 優子

18 地球を集める
物は町に、情報は村に
一反比例の関係ー
八杉 隆穂

20 生きもの博物館
トウモロコシから生まれたマヤ文明
青山 和夫

22 フィールドで考える
ビルマで歌を学ぶ
井上 さゆり

24 特別展
「更紗今昔物語ージャワから世界へー」
次号予告・編集後記